

原因のひとつに「生活・経済問題」があることも指摘されています。この背景には、「男は仕事」という意識が社会に根強くあり、「家族を経済的に支えなければならぬ」という責任感が男性に重くのしかかっていることがあげられています。

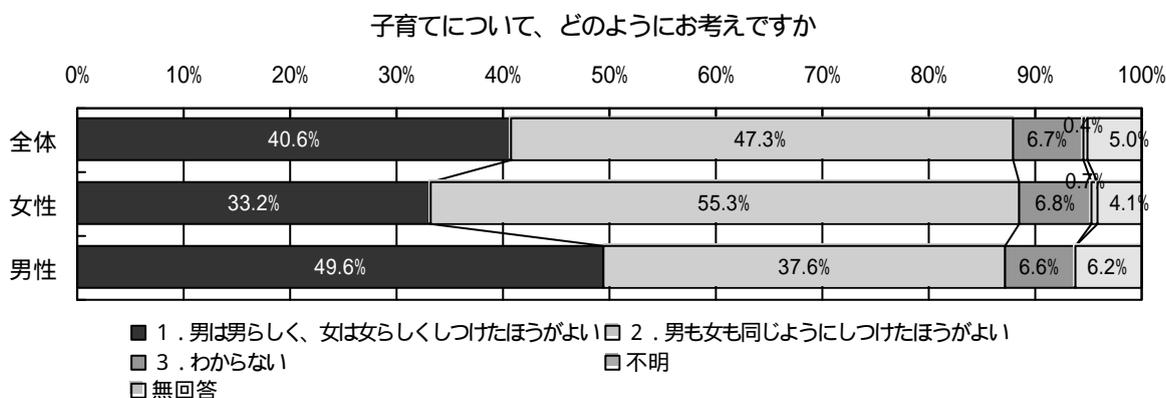
一方、2 - 2 では約 3 割が主に女性が子育てを担っていると回答しています。母親のみに子育ての責任がのしかかる場合、それを一手に引き受けている母親の精神的負担は大きく、その影響は次のセクション 3 において述べられるとおりです。しかし、同時に、約 3 割が子育ては共同で行うと回答しており、今後この傾向が増すことが期待されます。

3 子育てについて

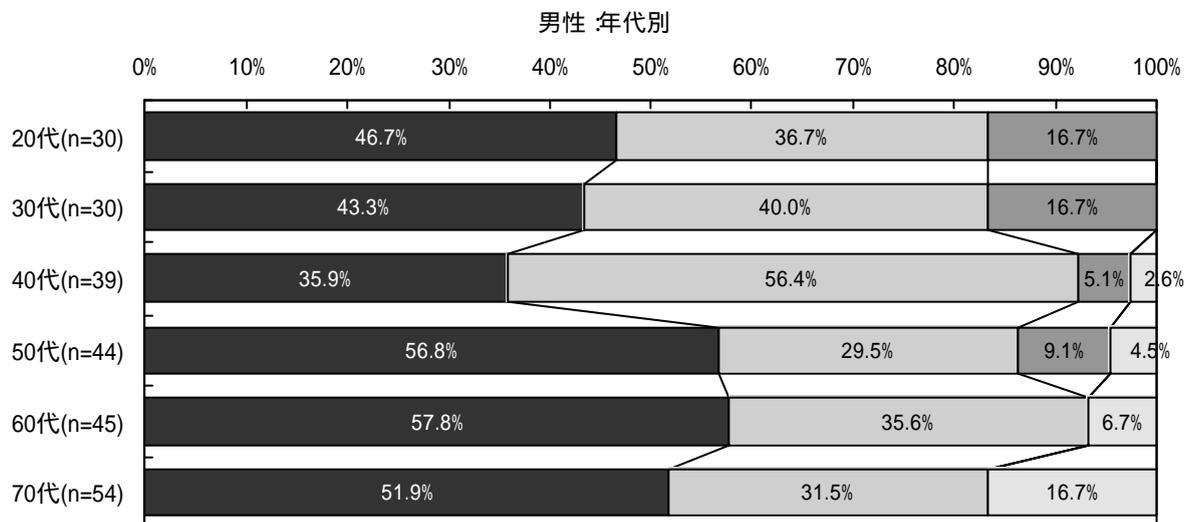
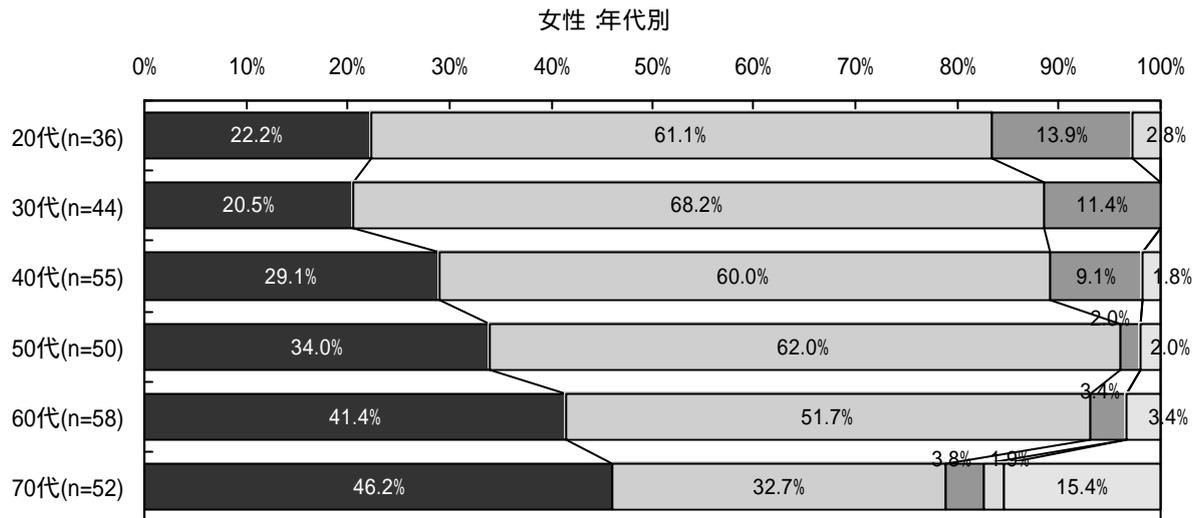
このセクションでは、子育てについての現状・意向を把握し、必要な支援策をさぐることを目的に、子育てについての考え方（問 5）と子育てにあたって困っていること（問 6）についてたずねています。

< 分 析 >

3 - 1 子育てについての考え方（問 5）



全体としては、男性は「男は男らしく、女は女らしくしつける方がよい(49.6%)」と考えている人が最も多く、これに対して女性は「男も女も同じようにしつけたほうがよい(55.3%)」と考える人が最も多くなっています。



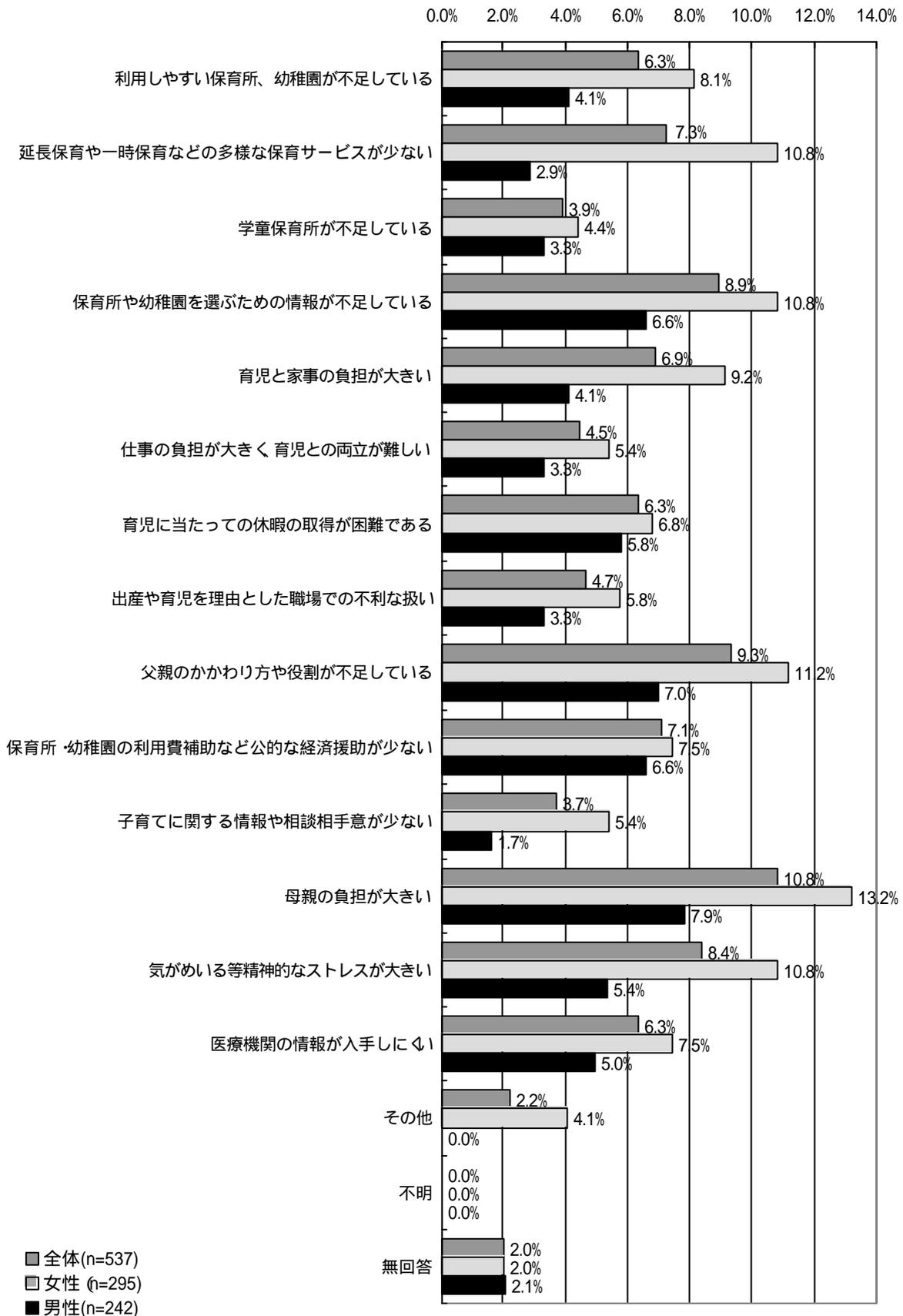
■男は男らしく、女は女らしくしつけたほうがよい □男も女も同じようにしつけたほうがよい
 ■わからない □不明
 ■無回答

しかし男性を細かく年代別でみると、40代男性は「男も女も同じように（56.4%）」のほうが「男らしく、女らしく（35.9%）」よりも20.5ポイント多く、30代男性では「同じように（40.3%）」は「男らしく、女らしく（43.3%）」とあまり変わりません。50代以降になると半数以上が「男らしく、女らしく」を支持するようになってきます。

一方、女性は20代から50代では6割以上が、60代ではほぼ5割が「同じように」を支持しています。

3 - 2 子育てにあたり困っていること（問6）

子育てにあたり困っていること(複数回答)



全体としては、「母親の負担が大きい(10.8%)」「父親のかかわり方や役割が不足している(9.3%)」「保育所や幼稚園を選ぶための情報が不足している(8.9%)」の順で困ることをあげています。これらは、性別・年代による差がほとんど見られず、男女ともに・あらゆる世代でこのような悩みを抱えているといえます。

【子育てにあたり困っていること(性・年代別)】 (%)

	N	が不足している 利用しやすい保育所、幼稚園	延長保育や一時保育などの多様な保育サービスが少ない	学童保育所が不足している	保育所や幼稚園を選ぶための情報が不足している	育児と家事の負担が大きい	仕事の負担が大きく、育児との両立が難しい	育児に当たつての休暇の取得が困難である	出産や育児を理由とした職場での不利な扱い	父親のかかわり方や役割が不足している	保育所・幼稚園の利用費補助など公的な経済援助が少ない	子育てに関する情報や相談相手が少ない	母親の負担が大きい	気がめいる等精神的なストレスが大きい	医療機関の情報が入手しにくい	その他
全体	537	6.3	7.3	3.9	8.9	6.9	4.5	6.3	4.7	9.3	7.1	3.7	10.8	8.4	6.3	2.2
女性	295	8.1	10.8	4.4	10.8	9.2	5.4	6.8	5.8	11.2	7.5	5.4	13.2	10.8	7.5	4.1
20代	36	13.9	16.7	8.3	22.2	16.7	5.6	13.9	16.7	16.7	22.2	13.9	19.4	16.7	5.6	8.3
30代	44	27.3	31.8	15.9	36.4	25.0	15.9	25.0	13.6	29.5	20.5	13.6	34.1	22.7	20.5	9.1
40代	55	10.9	21.8	3.6	12.7	16.4	10.9	5.5	5.5	23.6	9.1	9.1	27.3	27.3	18.2	9.1
50代	50	2.0	0.0	2.0	2.0	2.0	2.0	2.0	4.0	2.0	0.0	0.0	4.0	2.0	2.0	0.0
60代	58	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
70代	52	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
男性	242	4.1	2.9	3.3	6.6	4.1	3.3	5.8	3.3	7.0	6.6	1.7	7.9	5.4	5.0	0.0
20代	30	6.7	0.0	0.0	13.3	3.3	0.0	3.3	3.3	0.0	10.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
30代	30	16.7	20.0	16.7	26.7	20.0	16.7	23.3	16.7	23.3	26.7	6.7	30.0	20.0	23.3	0.0
40代	39	7.7	2.6	7.7	10.3	2.6	5.1	15.4	2.6	17.9	10.3	5.1	17.9	12.8	12.8	0.0
50代	44	0.0	0.0	0.0	0.0	2.3	2.3	0.0	2.3	4.5	0.0	0.0	2.3	4.5	0.0	0.0
60代	45	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	2.2	2.2	0.0	2.2	0.0	0.0	0.0
70代	54	0.0	0.0	0.0	0.0	1.9	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	1.9	0.0	0.0	0.0

次に年代別でくわしくみると、20代の男女、30代女性では「保育所や幼稚園の情報不足」が最も多くなっています(20代女性22.2%、20代男性13.3%、30代女性36.4%)。このことから、保育所や幼稚園の必要性の高いこの世代への情報伝達が十分でないことがよみとれます。また、「延長保育や一時保育などの多様な保育」への要望は30代女性(31.8%)、40代女性(21.8%)、30代男性(20.0%)で、「保育所・幼稚園の利用費補助」などの公的援助を求める声は、20代男女・30代男女で大きくなっています。

40代女性では「母親の負担が大きい(27.3%)」「気がめいる等精神的なストレスが大きい(27.3%)」が最も大きな悩みとしてあげられています。20代・30代・40代の女性は「母親の負担感が大きい」ことや、「気がめいる等精神的ストレス」を強くうたえています。しかし、「父親のかかわりや役割の不足」をあげる声も多いことから、父親の家事・育児負担が十分でなく、女性の大きな負担となっていることがわかります。しかし、この現状に対して子育て最中の30代・40代の男性も「母親の負担が大きい」ことを一番にあげている(30代30.0%、40代17.9%)ことから、解消すべき問題として意識している様子もみてとれます。

特に30代男性の20.0%が「育児と家事の負担」を感じていること、同じく23.3%が「育児のための休暇取得困難」をうたっていることから、この世代の子育てと家庭生活の両立は男性にとっても難しいといえます。家事・育児にかかわる必要性を感じてはいても、職場の状況などからそれもかなわずにいることが「精神的ストレス(30代男性・20.0%で男性中最多)」となっているようです。

<まとめ>

子どもの育て方に性別を意識したしつけの必要を強く感じているのは、男性で特に50代以降であることがわかりました。乳児・幼児の子育て最中にある世代(男性も含む)や女性は、それと対照的に性別によらないしつけを支持しています。このことから、子育て現役世代や広い世代の女性の間では、子育てにおいて性別を強く意識する傾向は薄れてきているといえるでしょう。「男の子は男らしく」「女の子は女らしく」という意識で子育てをする傾向は国の調査でも同様に男性に強く見られます(「子どもと家族に関する国際比較調査」総務庁1994年によれば、「男の子は男らしく、女の子は女らしく育てる」ということに対して日本の父親の84.9%、母親の72.3%が肯定的〔そう思う+どちらかというと思う〕でした)。

また、子育てにおける母親の負担感はかなり大きいものとなっています。30代・40代女性では特に母親の精神的なストレスは深刻であり、子育てを社会で担う環境整備のための多様な保育サービスの提供が求められます。その施策には働く親のみならず、家庭にこもりがちで孤独な育児を担う母親への多様な保育サービスも含まれる必要があります。延長保育の充実で働く親を支えることや、一時保育で深刻なストレスをかかえる母親を救うことも重要な課題です。さらに、保育所・幼稚園の情報不足をうたえる親たちが多いことから、外出の難しい乳幼児を抱えた20代・30代の親たちが、より簡単に確実に情報が入手できるような広報手段が求められています。

なお、育児ストレスの問題は、女性がかかえることが多いため女性への対策が主流になりがちですが、これからは男性への視点も必要です。今回の調査では、労働時間を短くして家庭生活にもっと時間をかけたいと願っている男性がいることもわかりました。こうした男性たちのためにも、労働時間の短縮や休暇取得困難の解消などによって、仕事と家庭生活の両立が可能となるような職場環境を整備する対策も考えられるべきでしょう。そのことが、女性への家事・育児・介護の過重な負担を軽減することにもつながります。

このように、これからは子育て支援は母親たちのため、という限定された視点をこえて考えられるべき時代です。男性にとっても家庭生活を充実させることは一つの権利ですし、その中の一つである「子育て」は貴重な経験であり、人生を豊かにする大切な要素でもあります。家庭生活の充実という願いがかなわずに精神的ストレスをかかえる男性も出てきていることがわかった今、対象を性別で限定しない子育て支援を考えることもこれからは必要になってきます。

<参考>

子育てにおける母親の精神的負担が大きいという問題は、子育てを《女性の役割》とする日本社会の特徴的問題としても語られています。たとえば、子を生む女性には生来的に子育ての能力が備わっているので、子育てを女性に任せるのは

当然とする「母性神話」や、子どもは3歳になるまでは母親の手で育てられるべきであるという「三歳児神話」が広く社会に浸透してきた背景から、子育ての責任を一人で背負っている母親たちは、育児の悩みやつらさを言葉にすることもはばかれ、大きな精神的ストレスを抱えることになっています。内閣府の「国民生活選好度調査」(1997年)によれば、子育てにおいて「なんとなくイライラする」とこたえた母親は専業主婦で「よくある」「時々ある」をあわせると78.7%、共働き主婦では86.6%にもなります。

そのような中で、政府は平成10年の『厚生白書』において「母性」の過剰な強調が母親に過剰な責任を負わせたことや、「三歳児神話」の合理的根拠が認められないことを以下のように明らかにしました。

第1編第1部第2章1-3

<「母性」の過剰な強調が、母親に子育てにおける過剰な責任を負わせた。>

戦後の高度成長期を通じ男女の役割分業が確立していく過程で、欧米における子どもの発達に関して母子関係を重視する研究の影響なども受け、子どもに対する特別な影響力を有する母親の性質「母性」の役割の重要性が強調された。

「母性」とは、通常、産む性としての女性が有する性質としてとらえられるが、その内容は、妊娠・出産し哺乳し得る能力として限定的に理解するものから、そのような生得的能力に由来する女性特有の子育て能力として理解するものまでその概念はあいまいかつ多義的である。

このような「母性」概念のあいまいさの中で、子育てにおけるこの「母性」の果たす役割が過度に強調され、絶対視される中で、「母親は子育てに専念するもの、すべきもの」という社会的規範が広く浸透していった。

しかし、妊娠・出産・哺乳が母親(女性)に固有の能力であるとしても、例えば、おむつを交換する、ごはんを食べさせる、本を読んで聞かせる、お風呂に入れる、寝かせつけるといった育児の大半は、父親(男性)によっても遂行可能である。

休業制度において、産前産後の休業が女性だけに認められるものであるのに対し、育児休業が性別のいかに問わず取得することが可能なものとなっていることは、まさにこうしたことを前提にしたものといえる。もっとも、現実の意識としては、「子どもの世話の大部分は、男親でもできる」と思う者は、女性で75%、男性では49%にとどまっている。

第1編第1部第2章1-5

<三歳児神話には、少なくとも合理的な根拠は認められない。>

三歳児神話というのは本当だろうか。三歳児神話とは「子どもは三歳までは、常時家庭において母親の手で育てないと、子どものその後の成長に悪影響を及ぼす」というものである。

三歳児神話は、欧米における母子研究などの影響を受け、いわゆる「母性」役割が強調される中で、育児書などでも強調され、1960年代に広まったといわれる。そして、「母親は子育てに専念するもの、すべきもの、少なくとも、せめて三歳ぐらいまでは母親は自らの手で子どもを育てることに専念すべきである」ことが強調され続けた。その影響は絶大で、1992(平成4)年に行われた調査結果においても、9割近い既婚女性が「少なくとも子供が小さいうちは、母親は仕事をもたず家にいるのが望ましい」という考えに賛成している。

しかし、これまで述べてきたように、母親が育児に専念することは歴史的に見て普遍的なものでもないし、たいていの育児は父親(男性)によっても遂行可能である。また、母親と子どもの過度の密着はむしろ弊害を生んでいる、との指摘も強い。欧米の研究でも、母子関係のみの強調は見直され、父親やその他の育児者などの役割にも目が向けられている。三歳児神話には、少なくとも合理的な根拠は認められない。

このように「神話」として認知されるようになっても、いまだに女性には育児の期待がかけられ、その重い責任が課せられています。たとえば、県女性政策室(当時)の「平成8年度意識調査」によれば、<育児・子育ては女性の役割である>に対して、《肯定派》(まったくそのとおり+ある程度そう思う)は男性が77.8%、女性が72.6%にのびます。また、同様に<子どもが3歳になるまでは、

母親は家庭にいるべきである>に対しては、《肯定派》は男性 84.0%、女性 84.1% となっています。このように「神話」の影響はまだまだ強いといえます。したがって、このような意識とそれにもとづく慣習と制度を改革するためにも、子育てを社会全体の問題として共有する視点が、今後あらゆる行政施策に盛り込まれることが必要となっています。

4 老後の生活と介護について

このセクションでは、老後の生活や介護に対する意向の把握を目的として、老後の生活への不安（問7）と自分の介護を希望する相手（問8）についてたずねます。

< 分 析 >

4 - 1 老後の生活への不安（問7）

老後の生活不安(2つまでの複数回答)

